

エッセイ

随想 私の川柳考

瀬谷 俊二郎

従来、川柳とは殆ど無縁であった私が川柳と多少かかわりを持つことになった経緯から始めよう。

昨年の11月料理教室で知り合いとなつてゐる女性から川柳への投稿を薦められたのである。

何でも大和市（の外郭団体）が川柳の募集を始めた由で、団体関係者の彼女としてはできるだけ多くの応募者を集めたいということであつた。

年に一度、第一生命が発表するサラリーマン川柳を読んだ記憶があり、なかなか面白いジャンルだと思つていたのでこの機会をとらえ応募してみようと即座に思ひ定めた。

丁度そのころ我が家では娘一家が引越してきたばかりで、妻は異家族同居に伴うカルチャーショックや引越整理の手伝い等何やかやと心身過労で体調を崩し、医者から入院して静養・加療する必要があるといわれていた時期で

あつた。

こんな背景もあり、句はすぐに思い浮かびその場で応募用紙に記入し「昴（俳人名？）」名で投稿した。

「妻病みて 家事の重さを 思い知る」
当時の実感そのものである。

そして1か月ほどたった12月下旬、久しぶりに料理教室で出会つた彼女から「貴方の句が入选していますよ」との知らせを受けた。妻のほうは12月上旬から1週間ほど入院して既に退院しており、筆者のほうも家事の重みが徐々に減つてきていたこともありこの川柳のことはすっかり忘れていた。

応募句数は百数十で入選は六句の由。
句が入選作として料理教室がある大和の駅前スカイビル5階の大きな展示板に貼り出され、多くの人が見ることになつた以上、作者としては「そもそも川柳」とはぐらひは知つておかないと思つたので、それほど改まつたわけではないがネットで調べた結果を以下の通りまとめてみた。

川柳と俳句は一見似ているが内容は全く違うものなのでこれを対比すると

イ 定型は五七五でおなじである。

ロ 言葉は川柳では口語を使うが俳句は文語である。

ハ 俳句では季語、切れ字が必要であるが川柳では不要である。

二 俳句は自然、事象を詠んだものが多く、川柳は生活の場で拾つた可笑しみを取り上げたものが多い。

となるが、もう少し掘り下げてみると、両者ともその起源は和歌に行き着く。

和歌が多数人に次々と詠み継がれる連歌となつて江戸中期に人気をたかめたが、この連歌にユーモアやアイロニーを盛り込んで遊びの要素を強くした「俳諧連歌」が川柳の源になつたといわれる。

1765年お題となる下の句を除いてもわかりやすい優秀な句を集めた句集（排風柳樽）が刊行され、その点者（作品を評価し優劣を決める人）の名前（＝柄井川柳）から川柳と呼ばれるようになった。

発句として必要な約束事や題材の制約がなく生活の場に根差した人事、世帯、人情等まで何でも扱われる。

一方、俳句は発句（連歌のおける一番初めの上の句）が独立したもので、この発句における季語、切れ字（や、かな、けり・・・）等の約束事がそのまま引き継がれ、さらに題材も発句としての格調が保たれるものに限られる。始祖は江戸前期の松尾芭蕉といわれており、川柳よりやや古い。俳句は自然、事象を対象に「詠む」ことが中心であるが川柳は「吐く、ものす」となる。

・川柳はいつでもどこでも気軽に表現できる文芸であり、生活の場の「可笑しさ」を盛り込んで読み手を楽しませることが出来る便利なものなので読者の方々にも気軽に参加されてはいかかかと作り方をまとめてみた。

・まず次の基本三点に留意する。

イ. 形 五七五の17音
ロ. 言葉 日常の話し言葉、
わかりやすい言葉

ハ. リズム 五七五の17音は
日本古来からのもので覚えやすい

・良い川柳は以下の三要素を備えているという。

イ. 穿ち 穿った視点というように正面からは見えにくいものを普通とは違った視点でとらえる。

ロ. 軽み さらりと詠んで後ろにある奥行きを感さる。

ハ. おかしみ ゆっくり伝わるユーモアで瞬発的な笑いは異なる。

さらに良い句を詠むためには、川柳の知識を深め、技術を磨き、適したテーマを取り上げる等なかなか奥が深いようである。話を戻そう。

受賞後の成り行きについて話すと、市の広報誌に掲載、記念品の受領、FM大和出演が行われた。

FM大和出演は12月下旬に放送局のスタジオで録音採りがあり女性キャスターと歓談する等の余録を楽しんだ。(放送は今年の1月11日と18日)

最後に俳句と川柳の性格の違いを端的に表現した句を見つけたので玩味いただきたい。

俳句 古池や蛙飛びこむ水の音
川柳 芭蕉翁ぼちゃんといふと立ち留まり

そして エッセイを二句で締めむと想を練る と

川柳と俳句の違い柳と芭蕉
吹く風を上手に流す川柳(かわなぎ)
終